

## 主な血漿分画製剤の自給率の推移等について

○平成18年度の血漿分画製剤の需給状況（需給計画との比較）【速報値】	1
○血漿分画製剤の自給率の推移（供給量ベース）【実績】	2
○主な血漿分画製剤の自給率の推移（年度・供給量ベース）	3
○アルブミン製剤の供給量と自給率	4
○免疫グロブリン製剤の供給量と自給率	5
○血液凝固第Ⅷ因子製剤の供給量（遺伝子組換え型含む）と国内血漿由来製剤の割合	6

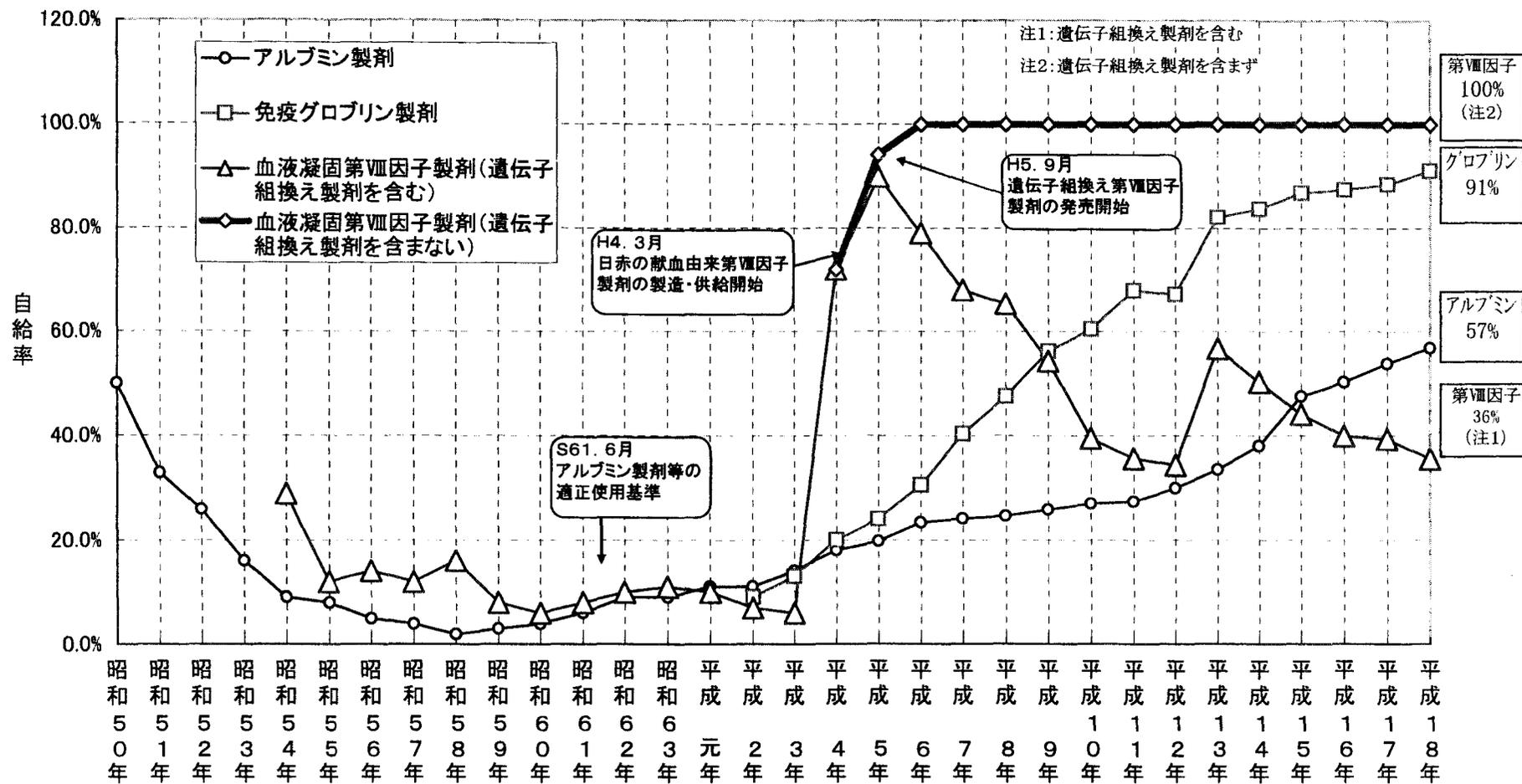
平成18年度の血漿分画製剤の需給状況(需給計画との比較)【速報値】

製剤名	換算規格・単位	製造・輸入量		③供給量	自給率(供給ベース)	
		①計	②うち国産原料		17年度	18年度
		上段:実績(達成率) 下段:需給計画	上段:実績(達成率) 下段:需給計画	上段:実績(達成率) 下段:需給計画		
アルブミン	25%50ml(瓶)	3,558,600 (106.1%) 3,353,100	2,130,800 (114.2%) 1,866,500	3,285,800 (100.9%) 3,255,500	53.7%	56.8%
乾燥人フィブリノゲン	1g	3,300 (106.5%) 3,100	3,300 (106.5%) 3,100	2,800 (112.0%) 2,500	100.0%	100.0%
組織接着剤	接着面積(cm2)	10,624,400 (110.9%) 9,581,500	5,399,500 (127.0%) 4,250,000	10,253,900 (110.2%) 9,308,100	45.3%	49.6%
血液凝固第四因子(遺伝子組換え型含む)	1000単位(瓶)	297,200 (87.5%) 339,700	121,700 (93.8%) 129,700	306,600 (93.2%) 328,900	39.3%	35.6%
乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子(複合体含む)	1000単位(瓶)	46,500 (124.0%) 37,500	46,500 (124.0%) 37,500	38,400 (105.5%) 36,400	100.0%	100.0%
インヒビター製剤	延べ人数(人)	13,200 (107.3%) 12,300	0 0	13,400 (134.0%) 10,000	0.0%	0.0%
ヒト血漿由来乾燥血液凝固第ⅩⅢ因子	(瓶)	108,400 (67.6%) 160,400	0 0	125,700 (91.6%) 137,300	0.0%	0.0%
トロンピン(人由来)	10000単位(瓶)	34,000 (114.9%) 29,600	34,000 (114.9%) 29,600	44,300 (148.7%) 29,800	100.0%	100.0%
人免疫グロブリン	2.5g瓶(瓶)	1,494,900 (100.3%) 1,490,800	1,398,400 (102.8%) 1,359,900	1,408,000 (107.0%) 1,315,400	88.6%	91.2%
抗HBs人免疫グロブリン	1000単位(瓶)	19,500 (89.4%) 21,800	600 (100.0%) 600	19,000 (80.2%) 23,700	2.6%	2.2%
乾燥抗D(Rho)人免疫グロブリン	1000倍	8,700 (124.3%) 7,000	0 0	9,100 (101.1%) 9,000	0.0%	0.0%
抗破傷風人免疫グロブリン	250単位(瓶)	98,200 (86.3%) 113,800	0 0	71,400 (94.9%) 75,200	0.0%	0.0%
乾燥濃縮人アンチトロンピンⅢ	500単位(瓶)	418,800 (123.0%) 340,600	391,700 (119.2%) 328,600	388,600 (100.2%) 387,800	94.9%	96.3%
乾燥濃縮人活性化プロテインC	2500単位(瓶)	640 (213.3%) 300	640 (213.3%) 300	230 (76.7%) 300	100.0%	100.0%
人ハプトグロビン	2000単位(瓶)	44,700 (108.5%) 41,200	44,700 (108.5%) 41,200	41,200 (93.8%) 43,900	46.7%	100.0%
乾燥濃縮人C1-インアクチベーター	500倍(瓶)	340 0	0 0	540 (85.7%) 630	0.0%	0.0%

注1. 数値は、製品の規格別に報告された数量を集計し、代表的な規格・単位に換算したうえ、四捨五入により100又は10の整数倍で表示した。

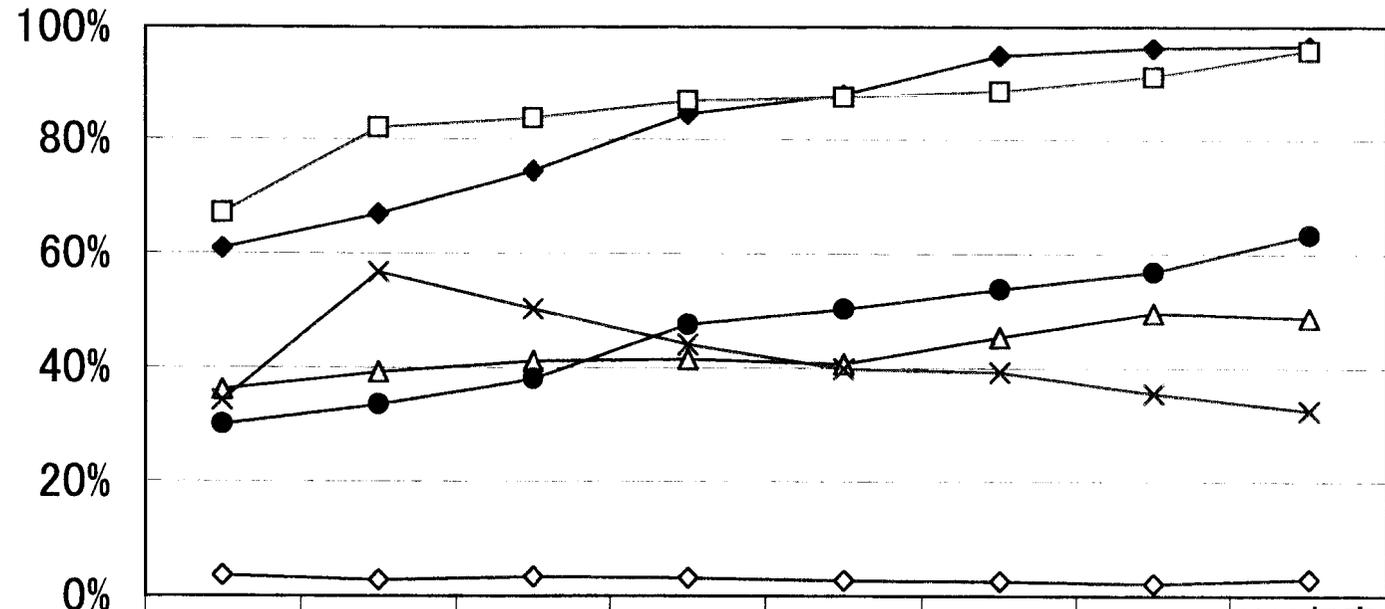
注2. 液状タイプの組織接着剤については、接着・閉鎖部位の面積当たりの使用量を勘案して換算し、インヒビター製剤については、体重50kgの人への投与量を標準として人数で算出した。

## 血漿分画製剤の自給率の推移(供給量ベース)



平成9年以前は年次、平成10年以降は年度

## 主な血漿分画製剤の自給率の推移(年度・供給量ベース)



	H12年度	H13年度	H14年度	H15年度	H16年度	H17年度	H18年度	H19年度 (見込)
◆ 乾燥濃縮人アンチロトピンⅢ	60.9%	67.0%	74.5%	84.5%	88.0%	94.9%	96.3%	96.6%
□ 人免疫グロブリン	67.1%	82.1%	83.8%	86.9%	87.5%	88.6%	91.2%	95.8%
△ 組織接着剤	36.2%	39.2%	41.1%	41.5%	40.7%	45.3%	49.6%	48.8%
× 血液凝固第Ⅷ因子(遺伝子組換え製剤を含む)	34.4%	56.7%	50.2%	44.1%	39.9%	39.3%	35.6%	32.5%
● アルブミン	30.1%	33.6%	38.1%	47.5%	50.2%	53.7%	56.8%	63.4%
◇ 抗HBs人免疫グロブリン	3.6%	2.8%	3.4%	3.2%	2.7%	2.6%	2.2%	2.9%

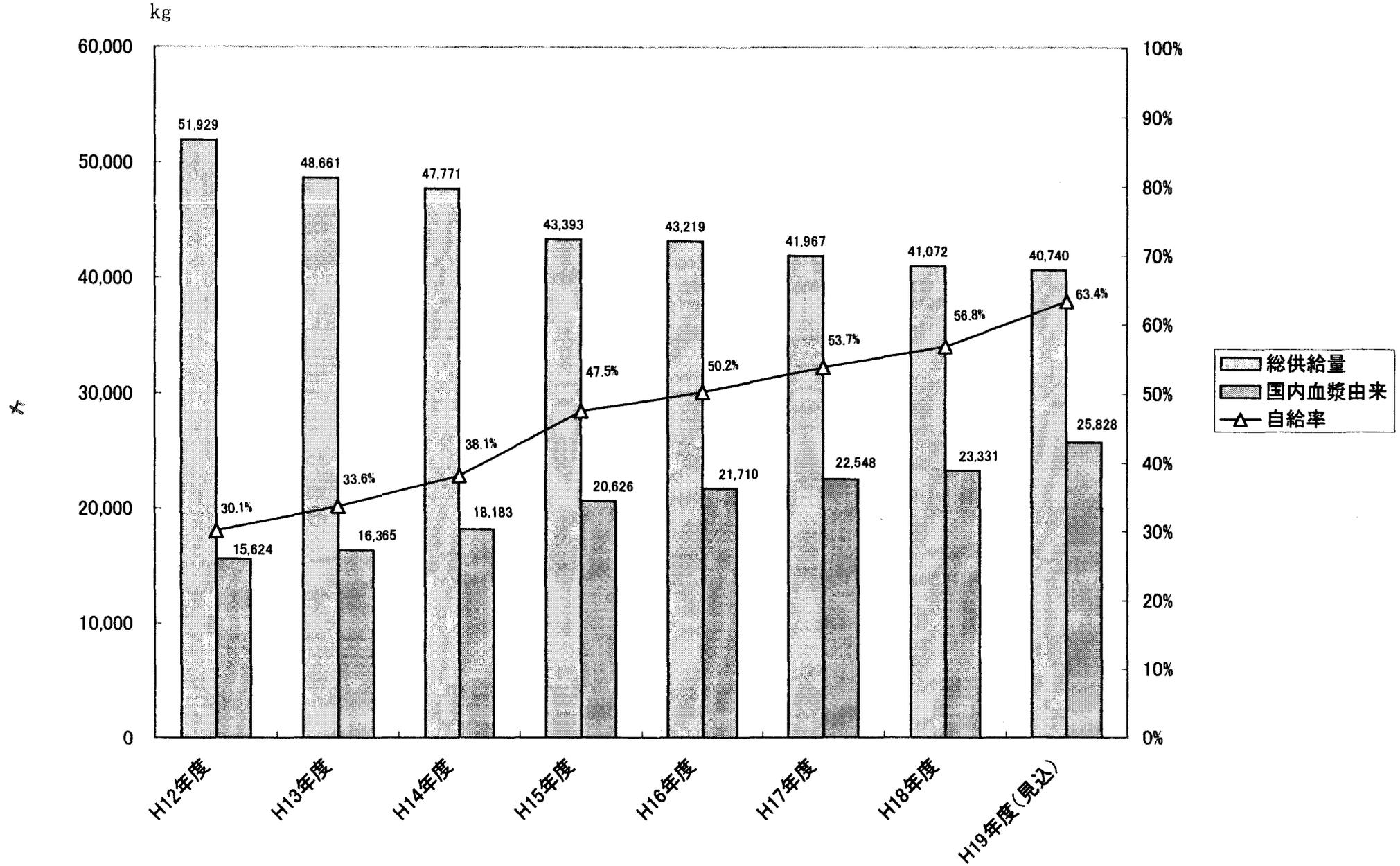
自給率100%のもの

乾燥人フィブリノゲン、血液凝固第Ⅷ因子(血液由来に限る)、乾燥濃縮人血液凝固第Ⅸ因子(複合体含む)、トロンピン、乾燥濃縮人活性化プロテインC、人ハプトグロビン

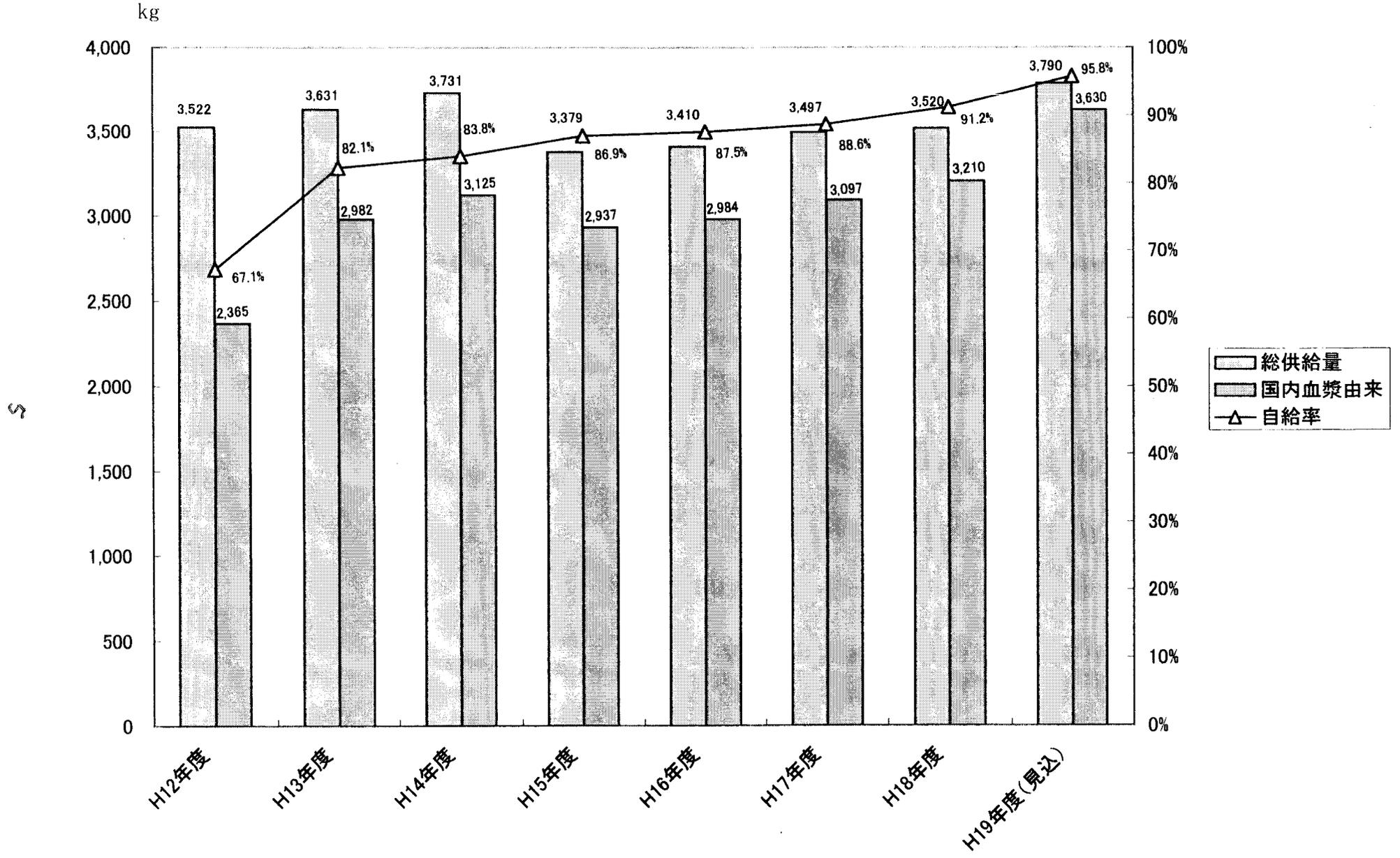
自給率0%のもの

インヒビター製剤、乾燥濃縮血液凝固第ⅩⅢ因子、乾燥抗D(Rho)人免疫グロブリン、抗破傷風人免疫グロブリン、乾燥濃縮人CI-インアクチベーター

# アルブミン製剤の供給量と自給率



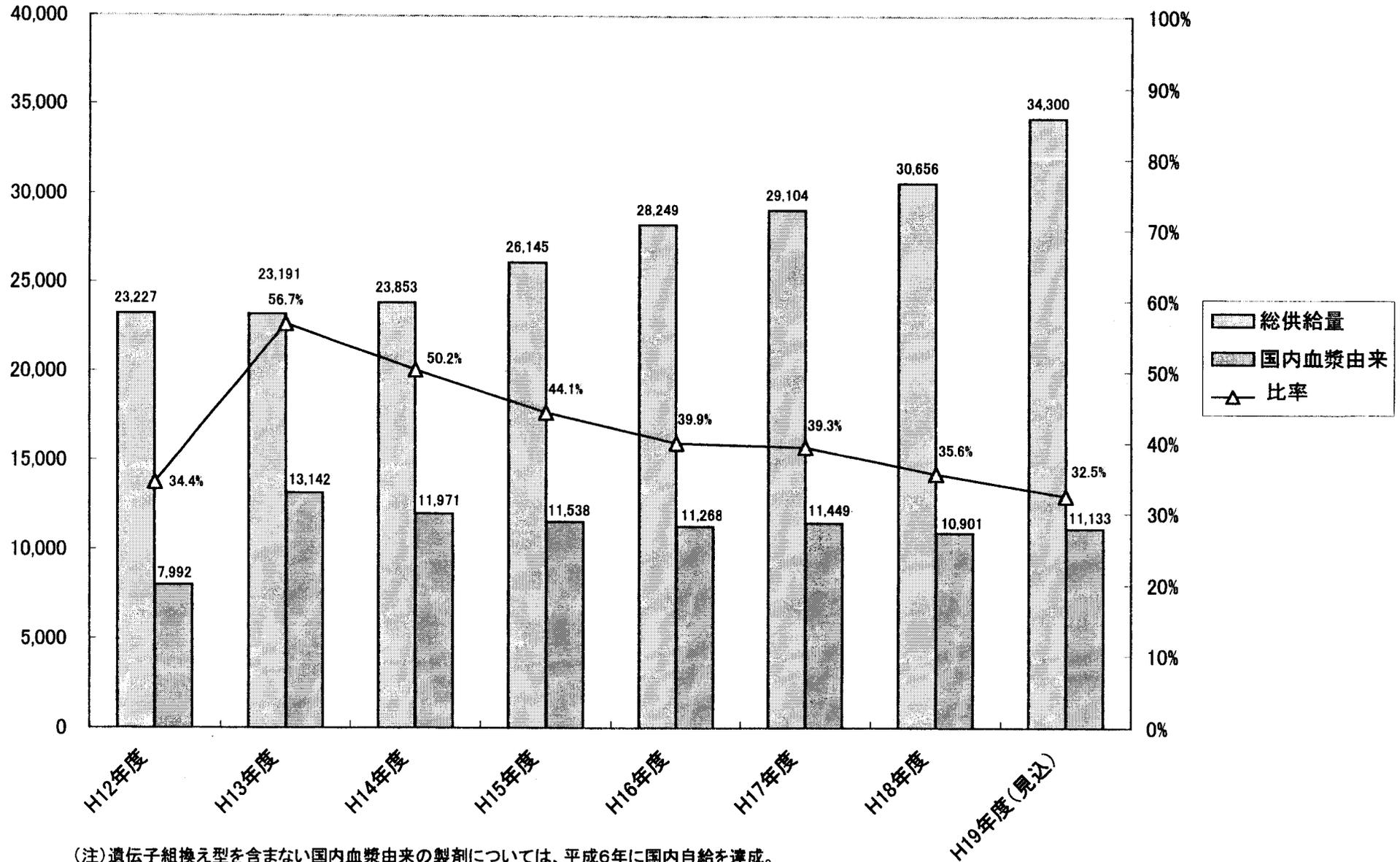
# 免疫グロブリン製剤の供給量と自給率



# 血液凝固第Ⅷ因子製剤の供給量(遺伝子組換え型含む) と国内血漿由来製剤の割合

万単位

9



(注) 遺伝子組換え型を含まない国内血漿由来の製剤については、平成6年に国内自給を達成。